



# 豊かな森川海

2012  
7.12  
第3号



## 目 次

【記念講演】 場所の記憶と共に生きる.....	2~4
【会務報告】 活動報告と活動計画 .....	5~6
【アユの話-2】 稚魚から成魚へ ~川での生活~ .....	7~8
【会員紹介】 岸本敬子理事、吉田裕之理事、廣瀬和孝監事 .....	9~10
【イベント情報】 .....	11
【表紙のことば】 .....	11
【編集後記】 .....	11

## 【記念講演】 場所の記憶と共に生きる：社会空間としての川を創造するために

大阪府立大学 現代システム科学域 福永真弓



### 見失われた関わりの記憶

都市から小川や水路そのものの姿がなくなって久しい。何気なく通りかかる道に、橋がかかっていた名残や、川筋であったことなどを思わせる地名がついていることに気付く人がどのくらいいるだろうか。あるものはコンクリ溝に、あるものは暗渠の下に、あるものは埋め立てられて道路や住宅、ビルに姿を変えている。わずかに残る地名や人の記憶の中になんか見られなくなってしまった姿を、想像したことのある人はどのくらいいるだろう。

大きな川でも状況は似ている。高度成長期以降、排水処理技術や下水施設が整うまで、都市の川は悪臭とゴミの溜まる場所だった。かつていた魚や川をおとなっていた鳥たちも見えなくなった。水質がずいぶん改善された現在でも、臭かった記憶が邪魔をするのか、三面張りのコンクリートで覆われた川に親しむことをためらう人も多い。安全のため、近寄ってはならないと学校から親から言われている子供たちも、川で遊ぶことはない。

水上交通や物流の要所として、あるいは水そのものを利用する産業が集まっていた町としての歴史も、断片的に配置された史跡や建物跡に残るものの、現在暮らす人びとの目にとまりにくい。

集合住宅や比較的新しい住宅が多く、人びとが頻繁にいれかわる都市では、川の自然史を、あるいは生業で川と深く関わりながら生きてきた人びとの物語の語り手も少ない。

そうして都市の川では、その場所がどのような自然史を持ち、人びとがどのような関わりを川と持ってきたのか、その関わりの積み重ねの結果、今の川がどのようなになっているのか、関わりの歴史的な全体、川の「来し方」は、人びとからは見えなくなる。

「来し方」の見えなくなった川は、日常の中の背景を形成しながらも、人びとの日常に欠かすことのできない生活空間として語られることはない。人びとの日常の記憶から取りこぼされた川は、人に「来し方」を思い出させる記しを身にまとうことができず、人びとの関心を得ることかなわず、背景として日常の中に埋没していく。

そして川は、人びとの身近な社会空間から姿を消し、色のない背景になる。

住吉川を再び魅力ある豊かな川にしたい。

そう願うとき、向き合うことになるのは、「来し方」を語れず、色のない背景となってしまう都市の川の「現在」である。再び「来し方」をおのずから語り、人をひきつける磁力をもつ場所にするために、どうすればいいのか。その点について、少し考えてみよう。

## 川と人びとの関わりを作り出す

自然豊かな川を再び取り戻したい。そう一口に言っても、豊かな川、というイメージがどんなものなのか、人びとの身近な社会空間ではなくなってしまった現在の川では、その想像はとても難しい。同じ川ではなくとも、「あの川は豊かな川だった」と自分が思い描くことのできる実像を経験的に知っていれば手助けになる。都市のいいところは、さまざまな知識と経験を持つ人びとが数多くいることだ。「豊かな森川海を育てる会」でも専門家が多いように、別の川を知っている人びと、生態学などの知識を持っている人びとが、生物や流域の水質について、いくつかのイメージを示せることはとても大きい。だが、専門家によるイメージの提示だけでは、人をひきつけ、積極的に流域に関わる動機をもたらすことは難しい。川を取り戻すための「人びとの力」を生み出すには、別の試みが必要である。

熊本県水俣市から始まった「地元学」や、日本自然保護協会が宮崎県綾町などで行っている「ふれあい調査」は、それまで専門家によって行われていた調査自体を、対象となる地域や自然環境と人びとの関わりを生み出すためのツールへ転換した例だ。市民調査と呼ばれることもあるこれらは、子供たちを中心にその親世代、祖父母世代、近所のおじさんおばさんたち、そして地元に関心を多少なりとも持っている、とにかく「地元の人」が中心となって、手さぐりで調査を行っていく。

地域の生物を探し、触れながら生息図を作る。水がどこから来てどこに流れるのか、川の中をざぶざぶと入りながら源流まで歩いてみる。小さな支流ものぼってみる。町中では、古い地名や屋号、今でも残る橋の名残や古い史跡などをたどりながら、自分たちだけの「地元の地図」を手書きで描き、好きな風景を探す。大切なのは、痕跡でもなんでも、「今あるもの」を探しながら、自分たちの暮らす場所を「身をもって」知ることである。

このような調査の特徴は、実際に歩き回り川に触れる、いうなれば地元の人が地元の場所をインタビューする調査だということにある。歩けば疲れるし、水は冷たく、多くの人と話すのも骨だ。だが調査を通じて参加者は、どのように人びとの営みと自然が相互に影響を与えあいながら、現在の姿になったのかを、身体で体感して「知る」ことができる。もちろん、過去は「そのまま復元すべき手本」ではない。調査の過程で参加者は、過去の姿を参照し、現在と比較しながら、何が地元の川の豊かさなのか、ふと考えている自分に気づくだろう。

もう一つ、とても重要なことがある。調査の経験それ自体、地元を新たにつなぐ大切な資源になるということである。同じように泥にまみれ、笑い、生き物をつかんで驚き、水の冷たさを共有し、調査に参加した人びとをつなぐ共通の経験は、その地域の新たな社会的ネットワークをつくる核、共有される地域の記憶になりうる。

また、昔の記憶を聞き、今でも所在を住吉川におく地場産業をたずね、あるいは上流にある森をたずね、その近くに住む人びとに河口域に住む人びとが話を聞きに行く。調査は、そうした人と人をつなぐ役割も果たしうる。身近なところに潜む達人や物知りを見つけられるかもしれない。

川に入ってガサガサ（網を入れて川の生物を追い込み、とること）をして、季節ごとに何がいるのか発見する、そんなことを繰り返したある日の学校からの帰り道、トンボがずっと川岸を飛ぶのを次に見たとき、ヤゴがたくさんいたところと、トンボが多くとんでいるところを重ね合わせて、そうか、と腑に落ちる。腑に落ちたことを近所のおじさんやおばさんに話してちょっと自慢する。感心しあう。いつか、そんな瞬間を子供たちが持てればいい。

アユだっけってきつと見え方はちがってくる。きらりと跳ねるアユが、いつ、どこで見られるのか、かつてここにいたアユを、人びとはどう楽しみ、味わっていたのか。あがっていた魚商はいたのか、釣り人はどこからきたのか。そんなことを想像するとき、アユは単なる光る魚ではなく、たくさんの人との関わりを身にまとった、川の「来し方」を語る生物として、目の前に現われるだろう。そんな未来を見てみたい。



地元調査は、川が「禍」をもたらすものであることにも気づかせる。現在の川の形は、治水を念頭に改変されてきたものでもある。水害や水難の記録や、流域の特徴を知ること、何が地域にとっての「リスク」であり、そのためにどのような対策が必要なのかも見えてくるかもしれない。ハード面の整備ではなく、災害時にどう動けるか、その社会ネットワークこそが必要であることは、阪神淡路大震災や東日本大震災の記憶からも明らかであろう。地元調査は、川の「恵み」だけではなく、「禍」についても関心呼び起こしながら、社会ネットワークをゆるやかに形成する可能性をも併せ持つ。

もちろん、完璧な試みとして型がある手法ではなく、順応的に対応しながら調査自体を組み立てていく必要のある、少しやっかいな調査手法ではある。けれど、人と人、川と人。両者を結びつける地元調査をすすめたい。現在の活動とあわせて、住吉川を魅力あふれる地元の川へ変える重要な一歩を踏み出すことができるのではないだろうか。

住吉川の川面の輝きや、水の甘い匂いや、それを運んでくる風のさわやかさが、人生の懐かしい思い出を彩る。あるいは、川沿いを散歩するとき、かつてこの川を行きかっただろう船頭や酒蔵を行きかう杜氏や職人の姿を想像し、地場産業に思いをはせ、歴史を楽しむことができる。そして、いつかの未来、自分が生きる今の住吉川の風景に、住吉川に生きる未来世代の誰かが思いをはせるのだろうかと思像する。

あるいは、同じ空間に多種多様な生物がいることや、気象条件や季節によって刻々と変わる、まるでそれ自体が生き物のように思える川の姿に実際に触れて、知的好奇心や探究心を培い、満たす。何よりも未来を生きる子供たちが、自然の面白さを感じて楽しむ。

そのような営みが日常の中に広がってきたとき、おそらく川は、おのずから「来し方」を人びとに語りだす。そのとき川は、新たな社会空間として地域社会に再び鮮やかな色をもった存在としてその姿を取り戻すだろう。

そういう未来を、見てみたいと心から思う。



## 【会務報告】

### 1. 活動報告

平成 24 年 4 月から 6 月までの主な活動について報告します。

#### 1) 会員の状況

昨年 9 月 18 日の設立時には、正会員は個人会員 20 名、団体会員 1 団体でしたが、平成 24 年 7 月 1 日現在、個人会員は 50 名、団体会員は 3 団体となりました。

#### 2) 平成 24 年度通常総会・記念講演会

4 月 21 日（土）に東灘区民センターにおいて平成 24 年度通常総会及び記念講演会を開催しました。総会では平成 23 年度事業報告及び収支決算、平成 24 年度事業計画及び収支予算、定款の一部改正、役員を増員の各議案は原案通り可決承認されました。定款変更の内容は①会員種別の変更、②理事の員数枠の拡大、③顧問の会費免除、④会費の一口制への変更でした。役員を増員では、岸本敬子氏、吉田裕之氏のお二人が新しい理事に選出されました。

総会の後、大阪府立大学准教授の福永真弓氏による「場所の記憶と共に生きる ～環境社会学からみえること～」と題した記念講演会を開催しました。環境社会学の視点から、人と流域のかかわりを軸に都会の流域に生きることについての講演で、要旨を巻頭に寄稿していただきました。

#### 3) 絵本づくり

兵庫県が実施している環境体験学習に役立てるよう、小学 3 年生を対象に「水の循環」をテーマとした絵本づくりに取り組んでいます。これまでに 5 回の絵本作成委員会を開催し、ストーリーやイラストを検討しました。

#### 4) 森づくり

5 月 16 日（水）に東お多福山で草原保全・再生活動としてササ刈りを行いました。5 月 27 日（日）には五助の森で育樹活動を行いました。当日はブナを植える会を中心に 17 名が参加し、これまでに植樹した植樹地周辺の下草刈りに汗を流しました。

#### 5) 川づくり

昨年度までに住吉川で 4 基の魚道を設置しましたが、平成 24 年度は国道 2 号線より上流側にさらに魚道を設置することになりました。6 月 14 日（木）に兵庫県神戸土木事務所河川課の担当者と現場で設置場所の選定や工法等について打合せを行いました。

#### 6) 里海づくり

6 月 3 日（日）に住吉川の河口干潟で第 3 回住吉浜祭りを開催しました。当日は家族連れなど総勢 230 名（うち子供 130 名）で干潟が人であふれました。当日は最初に「海と空の約束プロジェクト」代表の西谷寛氏による環境紙芝居に始まり、続いて大阪湾生き物一斉調査（生き物観察会）及び潮干狩り大会と大いに盛り上がりました。アサリコンテストでは 20 グラム超のジャンボアサリが続出しました。



環境紙芝居



潮干狩り大会



生き物一斉調査

## 7) 広報活動ほか

### ・津門川塾での講演

6月17日(日)に西宮市を流れる津門川で河川愛護活動を行っている地元自治会や市民団体が主催する津門川塾が開催されました。島本会長が住吉川流域の自然再生活動について講演し、都市河川のあり方について地域の方と意見交換を行いました。

## 2. 活動計画

平成24年7月から10月までの主な活動計画について紹介します。

### 1) 絵本づくり

当初の予定よりも遅くなりましたが、完成を目指していよいよ仕上げの段階に入ります。10月頃には皆さんのお手元に届けられると思います。

### 2) 森づくり

7月29日(日)に五助の森づくりの育樹活動を行います。7月25日(水)には東お多福山で夏の植生調査と笹刈りを行います。参加希望者は事前に事務局までご連絡下さい。

### 3) 川づくり

7月12日(木)には河川管理者と住吉川・川づくりの会を開催し、本年度の魚道づくりについて協議します。魚道の効果調査を兼ねたアユの生息状況調査は7月26日(木)に延期します。

### 4) 里海づくり

8月2日(木)午後1時から住吉川の河口干潟でアサリ調査と海岸清掃を行います。

平成24年の住吉川流域の活動経過及び活動計画は表のとおりです。

月	連絡協議会	森の活動 (五助の森づくり)	川の活動 (アユの棲みやすい川づくり)	海の活動 (里海づくり)	その他
1月	絵本作成委員会(14) 連絡協議会・川づくりの会 (30)				
2月	絵本作成委員会(25)		魚道設置工事(1~ )		中央環境審議会瀬戸内海部 会現地ヒアリング(22)
3月	連絡協議会・川づくりの会 (19) 絵本作成委員会(31)	草原活動(東お多福山、28)	魚道づくり現地見学会(2) 魚道設置工事( ~15)	海岸清掃・アサリ調査(26)	
4月	豊かな森川海を育てる会 総会・講演会(21)			近隣河口調査(9・23)	
5月	連絡協議会(14)	草原活動(東お多福山、16) 育樹活動(五助の森、27)	稚アユ遡上調査(7)	近隣河口調査(8)	
6月	絵本作成委員会(2・24)		魚道づくり現地調査(14)	住吉浜祭り(3) 大阪湾生き物一斉調査 (3)	津門川塾(17) 大阪湾セミナー (24)
7月	連絡協議会・川づくりの会 (12)	草原活動(東お多福山、25) 育樹活動(五助の森、29)	アユの生息状況調査(5) (魚道効果調査)		
8月				海岸清掃・アサリ調査(2)	
9月	絵本作成委員会(29)				
10月		植生観察会(東お多福山、10)			
11月	シンポジウム	植樹活動(五助の森、16) 草原活動(東お多福山、28)			
12月					

注)表中の数字は予定日(実施日)を示す。

## 【アユの話 その2】

### 稚魚から成魚へ ～川での生活～

水産生物保全アドバイザー 田畑和男

アユの稚魚が海から川に遡上を始める主な時期は4月、5月で、群れを作って川を遡っていきますが、彼らを待ち構えているのが数多く設置されている堰です。住吉川は川自体が急勾配のため防災上多くの堰が設置されており、人間の安全のためには仕方ないことですが、アユの溯上には時として邪魔になることもあります。しかし、アユの溯上行動は水温や個体密度の上昇のもとで流水や落水が刺激となって起こるので、堰の存在も遡上を刺激するのに役立っていると前向きにとらえることにしましょう。といっても高すぎる堰は住吉川においても明らかにアユの遡上を阻んでいたことは2009年の我々の調査からも明白でした。その後、国道2号線より下流部では兵庫県神戸土木事務所の英断で“高すぎる堰”が2年間で解消されたことは皆様ご存じのとおりです。

さて、川でのアユの食性はプランクトンから付着性の藻類へと替わります。アユは



住吉川の堰堤越えにチャレンジするアユ稚魚  
(藤巻良幸氏撮影)

櫛状歯で石の表面に付着している微細な藻類を体を反転しながら削りとり、石にきれいな笹の葉状の跡を残します。川石の表面は長年の水流でなめらかに丸くなっておりアユの摂餌に適していますが、山崩れなどによって新たに川に入ってきた石は表面がガタガタになっておりアユはスムーズに摂餌できません。石の大きさでいえば、大きな石は付着藻類の繁殖が安定しているのでアユの餌場としての価値が高くなり、実際、縄張りをもったアユが居るのをよく見かけます。石が小さくなるにつれて藻類の繁殖が不安定になり、アユの摂餌効率も低下するため餌場としての価値は低下していきます。それでも砂混じりの砂利場にも結構育ったアユがみられますが、このような所で育ったアユを食べてみるとがっかりする



ことがあります。理由はアユの塩焼きの旨さは付着藻類がぎっしり詰まった内臓（胃腸）のほどよい苦みによるものだと私は思っていますが、内臓に砂が混じっていてガリッとすることがあるためです。そして川の底が砂になると餌場としての価値は全くなくなります。

アユ稚魚は1日に体重の30～50%の付着藻類を食べる（摂餌率）といわれ、短期間で成長しますが、成長とともに徐々に摂餌率（結果として体重の増加率も）は減少していくので成魚になると摂餌量はあまり変化しなくなります。アユの縄張りは自身の食糧確保の意味合いが大きいわけですが、成魚になると縄張りの大きさ（約1m<sup>2</sup>）

がそれほど変わらないのは頷けるでしょう。しかし縄張りはすべてのアユに保障されているわけではなく、特に住吉川では縄張りアユは少なく、群れの中で多少とも優位に立ったアユが縄張りを持っている程度のように見受けられ、大多数は群れのままでいるようです。



住吉川の堰堤でアユ稚魚を捕食するコサギ（田畑和男撮影）

多くのアユが川に戻ってきたためにサギも策餌のためにやってきた自然の営みで、住吉川の豊かな生態系を示している。

そもそも海と川を往復するタイプ（両側回遊性といい住吉川のアユはこのタイプ）のアユの縄張り性は遺伝的にそれほど強くないとい

われているうえに遡上数が多いと縄張りを持たず群れで行動するアユが多くなるのも事実です。そのほか上流へと行けなかったアユは十分な藻類を食する環境に恵まれず仕方なく流下昆虫を食べていますが、その絶対量が少ないのでほとんど成長できない状態に陥ってしまいます。

アユの餌となる付着藻類は微細藻類の珪藻と藍藻が主ですが、藻体が長く伸びる種類の緑藻が繁茂するとこれをアユはうまく消化できないためアユの生育に悪影響がでますが、幸い住吉川ではこういった状況は今まで観察されていないようです。それは土砂が常に流下しており多少とも川底が動いているためと考えられます。他の川ではダムの影響等で河床が動かなくなるとこのような緑藻が繁茂しアユの生育に不適になることがよくあります。



## 【会員紹介】

第3号では、本年度の通常総会で新しく理事に就任いただいた岸本敬子さんと吉田裕之さん、並びに本会のお目付役である監事の廣瀬和孝さんに登場していただきました。

### 岸本敬子理事（ブナを植える会）

森～川～海を結ぶ 豊かな森川海を育てる会に入会して



六甲山にアジサイの季節がやってきました。はじめまして「ブナを植える会」の岸本です。各地の他の森林ボランティア活動に参加して10年余りになります。私が元気に過ごす日々の賜物です。今夢中になっているのが蕎麦打ちです。住吉川上流の五助の森の活動地の麓に住んで40年程になります。

五助の森は、桧の人工林の整備をして石ころの多いところで、アベマキ、ウリハダカエデ、コバノミツバツツジ、山桜、ヤマボウシ、クロモジ、イロハモミジなどの植樹は大変でした。年に3回程の植樹をし、活動地も奥へと3ヶ所になりました。これまでに植樹した苗木もしっかりと根付き大きく育ち、イロハモミジも可愛い葉をしっかりといっぱいつけています。豊かな森、緑を育てることは、川から海へと生物達に大きな恵みを与えることになります。また森は癒しの場でもあります。活動地はハイカー道に沿っておりますので、きれいに整備したいですね。

先日魚道づくりを見学、アユがどこまで遡上してくるのか楽しみのひとつです。海への活動にも参加させていただきたく思っております。これからも一緒に植樹、育樹へのご参加と、次世代に豊かで美しい国土保全のために、市街地に近い活動地ですので多くの方々のご参加をお待ちしております。

### 吉田裕之理事（神戸市立須磨海浜水族園）

川から海へ そして海から川へ



「どの魚が一番好きですか？」と問われたら、私は迷うことなくバラタナゴと答えます。1960年代、用水路の底は砂利で、水草のセキショウが揺らぐ川でした。夏は朝な夕なに川に入り逃げ惑う無数の小魚を追い、テグス網のなかで赤く青くきらめくタナゴのなんと美しかったことでしょう。しかし、その期間は長くはありませんでした。上流からの濁りや汚れが目立つようになり、農薬のにおいも感じた頃、川は遊泳禁止になり、疎遠になりました。

成長して大学で海の生物学を専攻した後、20年間は海洋環境系のコンサルタント会社に就職し、日本各地の海に潜って藻場を調べました。しかし、その頃はまだ、海と陸とのつながりの大切さについてははっきりとは知りませんでした。40代になり、仕事の舞台がダム建設な

どの河川事業に移り、特に生物への影響を和らげようと必死に汗をかいたつもりです。その結果、身近な生物が消えていった原因は、森川海のつながりが阻害されたことは無論ですが、多くの市民の関心が水の中から離れていたことにもあると学びました。

2010年度から須磨海浜水族園に勤務し、展示や社会教育などの活動を通じて、市民のみなさんを海に、川にいざなうことに力を注いでいます。住吉川は、私が感じていた森川海の問題をコンパクトに凝縮した川で、その一つ一つの問題にどう取り組むか、可能性は未知ですが、そこに道を感じています。

## 廣瀬和孝監事（兵庫県水産技術センター）

あなたの「自然」はどんなイメージ？

「自然を大切に」「自然を守ろう」「自然に還れ」と呼びかけられた時、皆さんはどんな「自然」をイメージしますか？



屋久島にて

私の生まれ故郷である京都市伏見区に、宇治川から淀川に注ぐ七瀬川（ななせがわ）という小さな川が流れています。私が「自然」という言葉を聞いた時に思い描くのは、子どもの頃に小魚やザリガニ、オタマジャクシを求めて、川をジャブジャブ歩いている情景です。

水から出ると足にヒルが垂れ下がっていることもありました。クワガタを捕りに行ってヤブ蚊の大群に襲われたり、やっと捕まえたキリギリスにかみつかれたり、そんなことも私の大切な自然との思い出です。

人が「自然」をイメージする時、子どもの頃の原体験は、大人になってからの学習や体験と同じくらい、とても大切なことのように思います。

かけがえのない自然を食いつぶしながら大量の廃棄物を産み出し、そのツケを子孫に回そうとしている世代の一人として、子ども達に「自然との思い出」を、たくさん残せたらと願っています。

定款で『次世代に豊かで美しい国土を継承し、持続可能な社会づくりに貢献する』と高らかに唱えるこの会の発展が、私の願いの実現にもつながるよう、監事の立場から尽力したいと思います。

只今は、明石市二見町にある兵庫県水産技術センターで、海や魚を大好きになってもらうことをモットーに、小学生などの見学案内を担当しています。皆さんも小学生になった気持ちで、見学にお越しくください。

<http://www.hyogo-suigi.jp/suisan/kengaku/>

### 【イベント情報】

夏休みになり各地でイベントが目白押しです。お子さんやお孫さんとお出かけ下さい。

#### 住吉川 清流の会

8月4日（土）住吉川親子水辺フェア 10時～12時 清流の道公園  
水生生物の観察会、東灘消防署による水のアーチ、河川敷清掃、工作教室ほか  
雨天の場合は翌日

#### 武庫川流域ネットワーク

7月28日（土）～29日（日）“活かそう水辺、つなごう流れ”近畿水環境交流会 in 武庫川・宝塚、会場は28日が宝塚文化創造館（14時からシンポジウム）、29日が宝塚劇場前河川敷（午前河岸清掃、午後ボートレース）、申込は実行委員会 072-839-9124（7月20日まで）

#### 兵庫・水辺ネットワーク

1. 7月14日（土）生田川川まつり 10時～、新神戸駅南側
2. 7月14日（土）藍那里山公園 やまももまつり 14時～ 里山体験、水辺の観察会

#### 兵庫県立人と自然の博物館のホームページから

1. 7月15日（日）くるくる回って落ちる種子を観察しよう 13:30～14:30 ひとくサロン
2. 7月29日（日）顕微鏡で水生昆虫を観察しよう 13:00～15:30 ひとくサロン

---

### 【表紙のことば】

夏が来ました！住吉川では子供たちの歓声で賑やかなことでしょう。いつまでもこのきれいな川を守りたいですね。

私は今「豊かな森川海を育てる会」から依頼をいただいて絵本を描いています。その主人公である水の精アクア君を、今回の表紙絵に登場させてみました。どんな絵本になるか楽しみにしていて下さいね。

### 【編集後記】

◆表紙を夏らしいイラストで飾りました。夏は子供たちがもっとも自然を体感する季節です。いつまでも豊かで美しい自然が子供たちのすぐ近くにあることを心から願っています。

◆今年もたくさんのアユが住吉川を上ってきました。魚道のおかげでずいぶんと上流に上るようになりました。

◆住吉浜祭りの潮干狩りには幼児を抱きかかえた母親の参加もあり、その活力に感動しました。

◆アジサイの美しい梅雨の日に、7月からの計画停電の予定表をながめています。

◆「節電の夏」になります。緑のカーテン・ゴーヤの成長に少しばかり効果を期待しています。

◆次号は森が赤や黄に色づき始める頃出す予定です。





### 豊かな森川海 第3号

2012年7月12日発行

発行 豊かな森川海を育てる会  
〒655-0007 神戸市垂水区多聞台 3-11-12-603  
TEL・FAX 078-782-3164

編集 白井信雄  
イラスト 有村 綾

E-mail [shimamoto@mtf.biglobe.ne.jp](mailto:shimamoto@mtf.biglobe.ne.jp)  
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~yutakana-morikawaumi/>